

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：35416

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2014

課題番号：23660122

研究課題名(和文) 出産・退院後早期の母親への継続支援に関する研究

研究課題名(英文) Study about continuation support to a mother in early stage after leaving

研究代表者

山口 扶弥 (yamaguchi, fumi)

広島都市学園大学・健康科学部・教授

研究者番号：60352051

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：出産後5日～6ヶ月に母親のうつ状態を縦断的に調査し、産後支援のあり方を検討する。研究協力が得られた産婦人科に通院中の妊婦に無記名自記式質問紙調査を実施。調査項目は母親の抑うつ傾向、生活上の困難、必要な支援等とした。分析方法は日本語版EPDSを用い、従属変数をうつ傾向有無、独立変数は各質問項目とするロジスティック回帰分析を行った。配布数170名、有効回答は101名(回収率59.4%)。うつ傾向の者は、産後2週間で20.8%、5日で19.8%と多かった。産後5日は母親自身の気持ちや体調が影響しているが、産後14日は生活環境、子どもを世話する上での悩み等に変化し、初産婦はうつ傾向になりやすかった。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to longitudinally study mothers' postpartum depression and discuss needs for postnatal care. Subjects were parturient women attending to Obstetrics-and-Gynecology clinics/hospitals. We conducted an anonymous self-check questionnaire survey on living difficulties and needs for support in addition to depressive tendency with Japanese version EPDS. We also performed logistic regression analysis, setting "Positive Depressive Tendency" as a dependent variable and questions on family situation and living difficulties, etc. as independent variables. Subjects were 101 mothers with valid response out of 170 (Response rate: 59.4%). Depression was reported by 19.8% on the 5th day after delivery and 20.8% after 2 weeks. In contrast to the subjects influenced by their own feelings and physical conditions on the 5th day, mothers on the 14th day suffered mental troubles due to living environment and child-rearing care and primiparas tended to show more depression.

研究分野：医歯薬

キーワード：母子保健

1. 研究開始当初の背景

(1) 少子高齢化が進む中、子供を産み育てることが一層重要であり、地域における母子保健の充実や子育て支援の施策が強化されている今日である。このような中、産後、育児に不安をもったまま家庭に戻る母親が多いこと、産後2週間～4週間にうつ症状がみられること、更に退院後早期支援の必要性などが報告されている。

(2) 退院後の母親への支援では、医療機関が電話相談や家庭訪問などの早期支援を実施している報告もあるが、医療機関の自助努力に留まっている。また、各市町村で保健師等が行う新生児訪問の多くは、地域によって「第2子は行かない」「要請があれば訪問する」など訪問対象が限定されており地域差があった。このような中、2007年度より「虐待予防の切り札」として「こんにちは赤ちゃん事業」が始まった。しかし、この事業では、対象家族を、「生後4ヵ月までの乳児のいる家庭全て」としており、支援時期に幅がある。つまり、様々な施策がとられているにも関わらず、退院してから保健センターが実施する新生児訪問までの間は、多くの母親にとって「公的支援が得られ難い時期」となっている現状は続いている。

2. 研究の目的

退院早期は「母親の身体の回復」と「育児のスタート」というデリケートな時期であり、「子どもとの新しい生活を軌道にのせる」産後1ヵ月間の早期支援を確立することは、母親が安心して産み育てる上で重要な課題であると思われる。そこで本研究では、妊娠期・出産・退院後早期・育児期における、母親の心理的变化及びニーズについて縦断的調査を行い、退院後早期支援を実施・評価し、母親への具体的な支援のあり方、妊娠期・出産・退院後早期・育児期支援システム

の構築に向けた支援を検討するうえでの一助としたい。

3. 研究の方法

(1) 対象者：H県内の研究協力の得られた産婦人科に通院している妊婦

(2) 調査方法：調査は①妊娠後期、出産後②5日、③2週間、④1ヶ月、⑤3ヶ月、⑥6ヶ月の各時期にアンケートを郵送し、返信があった妊婦に継続して送付した。アンケートは無記名自記式質問票とし番号で処理した。調査期間は2012年11月～2013年12月

(3) 調査項目：年齢、出産数、母親の抑うつ傾向、対児感情、児と母親の健康状態、育児状況、サポート状況、サービスの日頃の利用状況、日頃の夫との関係、夫の育児参加状況、生活上の困難と必要とする支援等。母親の抑うつ状態については、日本語版エジンバラ産後うつ病自己評価票を用いた。

(4) 分析方法

初産婦と経産婦にわけクロス表を作成し、回答の分布を比較した。

【母親の心理状態と影響する要因】

日本語版エジンバラ産後うつ病自己評価票により、9点以上を「うつ傾向あり」とした。うつ傾向の有無別にクロス表を作成し、回答の分布を比較した。次に従属変数「うつ傾向あり」とし、独立変数を各質問項目とするロジスティック回帰分析を行った。

【母親の生活上の困難と必要とする支援】

意味内容のまとまりのあるデータごとにコード化し類似性を基に分類しそれぞれの時期における内容をまとめ傾向を検討した。

(5) 倫理的配慮：本研究は、広島都市学園大学健康福祉学部看護学科倫理委員会の承認を受けた（認番号第2号）。

4. 研究成果

配布数 170 名のうち、有効回答が得られた 101 名を分析対象とした(回収率 59.4%)。

初産婦 45 名(44.6%)、経産婦 56 名(55.4%)。平均年齢は経産婦 32.2±4.5 歳(56 名)、初産婦 30.3±4.6 歳(45 名)であった。

【母親の心理状態と影響する要因】

うつ傾向を示した者は、産後 2 週間で 21 名(20.8%)、5 日で 20 名(19.8%)の順で最も多く、3 か月で 14 名(13.8%)、6 ヶ月で 13 名(12.8%)であった。また、産後 2 週間で経産婦と初産婦間で、初産婦の方がうつ傾向を呈し、有意な差がみられた。他の時点では差はみられなかった。

産後うつ傾向に影響していた要因は、産後 5 日では、「母親の健康状態」、「子どもが生まれて嬉しいと思うか」であった。産後 14 日では、「同居の有無」や「サポートを必要の有無」「赤ちゃんのお世話の方法がわからない」「初産婦」等であった。また、1 ヶ月から 6 ヶ月にかけては、「夫との関係」「夫への満足」「夫との会話」「夫の態度」等、夫との関係が影響していた。

産後直後は、母親自身の身体や子どもへの思いが強いが、退院し子どもの生活が始まると子どもの世話や育児サポートへと拡大し、時

間が経過するにつれ、夫も身近な夫に求める気持ちが強くなる。しかし夫のサポートはゴミ出し、片づけ、子どもと遊んでくれる等と主であり、その状況は「仕事をおいので、仕方がない・・・夫なりにしてくれている」と、満足はしていないものの夫の手助けに納得しなければならない状況も示唆された。

【母親の生活上の困難と必要とする支援】

母親の困り事では、育児、家事、児の成長発達のカテゴリにおいて、産後 5 日から産後 6 ヶ月までは同様の内容が示された。一方、産後 5 日「産後の母親の体調に関する不安」は産後 1 ヶ月「産後の母親自身の悩み」、産後 6 ヶ月「母親自身の悩み」に変化していた(図 1)。

産後 5 日から 1 ヶ月において、精神的に落ち込み、支援を求める者が多い。特に初産婦にとっては産後 2 週間目にその傾向が著明であった。また、産後 1 ヶ月以降は、改善し経産婦と初産婦の間に差はみられなかった。

特に産後 2 週間目の支援が重要であり、精神的な変動に合わせた支援が必要であることが示唆された。

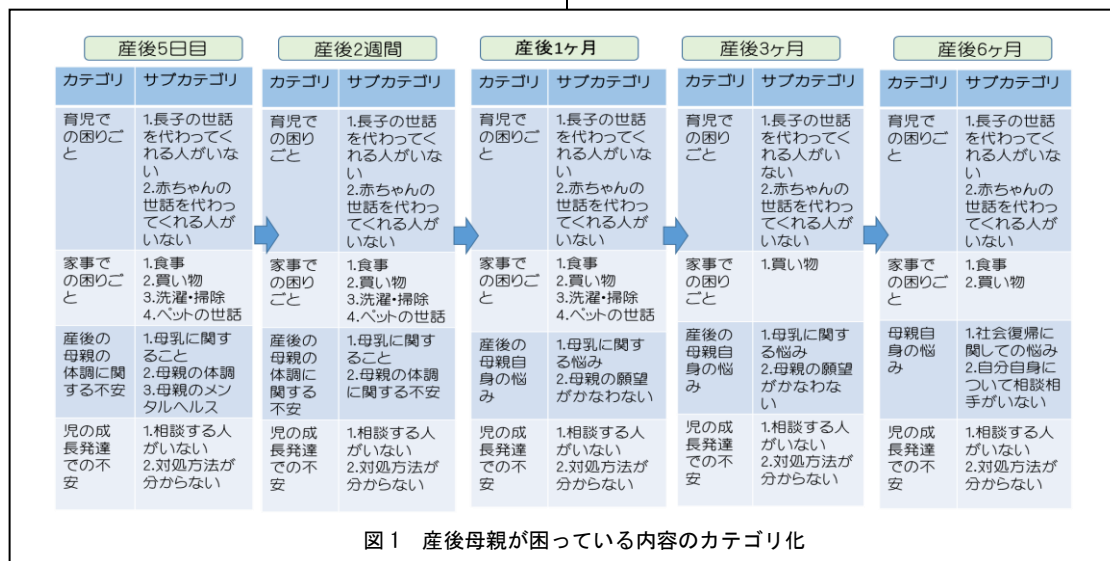


図 1 産後母親が困っている内容のカテゴリ化

5. 主な発表論文等

(研究代表者・研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

① 出産後の母親の困りごと ～産後5日から6ヶ月の縦断的調査によりみえてきたこと (第1報)

山口扶弥 田川紀美子 藤野成美

第34回日本看護科学学会学術集会2014, 11.29-30 (名古屋)

② YAMAGUCHI Fumi, TAGAWA Kimiko, FUJINO Narumi, KAKEHASHI Masayuki
THE 6th INTERNATIONAL CONFERENCE ON
COMMUNITY HEALTH NURSING RESEARCH
August19-21, 2015 (Korea)

Needs of mothers for support after
childbearing: A longitudinal study
focusing on postnatal depression.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口扶弥 (YAMAGUCHI, Fumi)

広島都市学園大学・健康科学部・看護学科・
教授

研究者番号: 60352051

(2) 研究分担者

藤野成美 (FUJINO, Narumi)

佐賀大学・医学部保健学科・教授

研究者番号: 70289601

(3) 連携研究

梯正之 (FUJINO, Narumi)

広島大学・保健学研究科・教授

研究者番号: 80177344